

北大キャンパスビジットプロジェクト 学生主導による開かれた大学創りを目指して

池田 文人*, 鈴木 誠

北海道大学高等教育機能開発総合センター

A Campus Tour Project in Hokkaido University: An Activity Conducted Mainly by Students

Fumihito Ikeda** and Makoto Suzuki

Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University

Abstract The Admissions Center of Hokkaido University organized a project called the Hokudai Campus Visit Project (HokudaiCVP) in May 2003. In this project, students of Hokkaido University guide high school students, their parents, their teachers and the general public around our campus for the purpose of articulation of university and high school or the local community. A distinguishing characteristic of the project is that the campus tours are managed by not only students but also teachers and officials of our admissions center. Various news media introduced the project to the general public, and nearly 900 people from not only Japan but also Korea took part in our tours from May to November 2003. This project is the second of three approaches for promoting the articulation of our university and high schools or the local community. The three approaches are (1) we visit various communities in person and communicate with them, (2) we communicate with the people who come to our university from the other communities, and (3) we communicate with the people who live in other communities by information technologies like the Internet. We earned out questionnaire surveys of the participants, and found that our campus tours were very effective for promoting the articulation of our university and high schools or the local community.

(Revised on March 1, 2004)

*) 連絡先 : 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター

**) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, JAPAN

1. はじめに

北大キャンパスビジットプロジェクト(以下、北大CVPと呼ぶ)とは、北海道大学を訪問する主に高校生や地域住民に対して、北海道大学の学生がキャンパスツアーを行う取り組みである。北大CVPを立ち上げた大きな理由は2つある。1つ目は、北海道大学への入学を希望する全国の高校生等に北海道大学の魅力を肌で感じてもらうためである。2つ目は、北海道大学のキャンパスが存在する地域に根ざした大学造りをするためである。

1つ目の理由の背景には、現在の情報の氾濫に伴う高校生等の大学に対する視野の狭さがある。大学進学を考えている高校生の多くは、インターネットを通じて大学に関する様々な情報をどこからでも収集することができる。しかもその情報は、テキストのみならず、写真や動画など、リアルな大学を伺い知ることのできる情報も多い。実際、全国各地で開催されている大学進学相談会で高校生の相談を聞いていると、自分の関心のある学部については我々教員以上に知っていることも多い。しかし、逆にここ5年ほどの間、北海道大学に入学した学生が学部や学科等とのミスマッチングで悩み、休学や留年などが増加傾向にある。高校生が入手できる大学に関する情報が豊富であるが故に、かえって進路選択の幅を狭め、自分の視野を狭めてしまっていることが大きな原因と考えられる。幸い、北海道大学を訪れる高校生は年間で2500名を超える。これだけの数の高校生が本物の北海道大学の姿を感じることができる。北大CVPを立ち上げることにより、北海道大学を訪問する高校生等に、大学のキャンパスをツアーすることを通じて、本物の大学の授業や研究、学生生活、大学の動きなどを肌で感じてもらう、大学入学後にさらに自分の資質を伸ばし、可能性を広げてもらうような意識付けを行っている。

2つ目の理由の背景には3つある。第1の背景は大学にも、社会への情報公開やアカウンタビリティが求められていることである。平成16年度からの国立大学の独立行政法人化にあたり、国は国立大学の教育や研究等の業績や中長期計画を評価し、その評価に応じた予算配分を行う。このように大学の様々な活動のほとんどすべてを社会に公開することが求められる中、特にその大学が存在する地域に対してのアカウンタビリティは大きい。

第2の背景は、地域の住民の北海道大学に対する関心の高さである。北海道大学では年間20講座以上の公開講座を小学生から一般市民までを対象に開講しており、いずれの講座も定員をオーバーする申込みがある。博物館が毎週末実施している北海道大学のキャンパスをフィールドにした自然に関するセミナーにも多くの一般市民が参加している。また、北海道大学の札幌キャンパスでは、朝夕、散歩やジョギングを楽しむ一般市民の姿や、美しいキャンパスに絵筆を振るったりカメラを向けたりする一般市民の姿が多くみられる。一方で、講演等の機会にそのような話をすると、大学のキャンパスに勝手に入ってよいのか、という質問をよく受ける。関心はあるが、大学の敷居はまだ高いという現状である。

第3の背景は、少子化である。平成16年度からの独立行政法人化により、大学の大きな収入源の一つは受験料や授業料になる。しかし、少子化に伴う18歳人口の減少に伴い、受験者や入学者の増加を見込むことは難しい。そこで、社会人の生涯学習の一貫として大学を活用してもらうことが必要となる。そのためには大学の教育や研究などの活動を広く社会に伝えるとともに、それが社会に役立つことをアピールしていく必要がある。北大CVPで一般市民を対象にした応募制のキャンパスツアーも実施することにより、地域に対する大学のアカウンタビリティの一端を担うとともに、より多くの地域住民に北海道大学への理解を深めてもらい、さらには社会人として大学に入学する機会にもつなげたい。

以上のように、北大CVPは高大連携と地域連携とを兼ねた重要な取り組みである。

2. 高大連携における位置づけ

北大CVPは、北海道大学における高大連携の将来構想において重要な役割を担う。

高大連携とは、単に高等学校と大学との連携のみならず、高等学校を含む地域社会との連携を図ることだと考える。つまり図1に示すように、大学入学前の進路選択の支援や地域に対する情報公開から、大学入試の改善、大学の教育や研究に対するフィードバック、そして卒業生や大学が社会から受ける評価のフィードバックまでを組み込んでいく必要がある。それらの活動の根幹を成すのがアドミッションポリシーである。

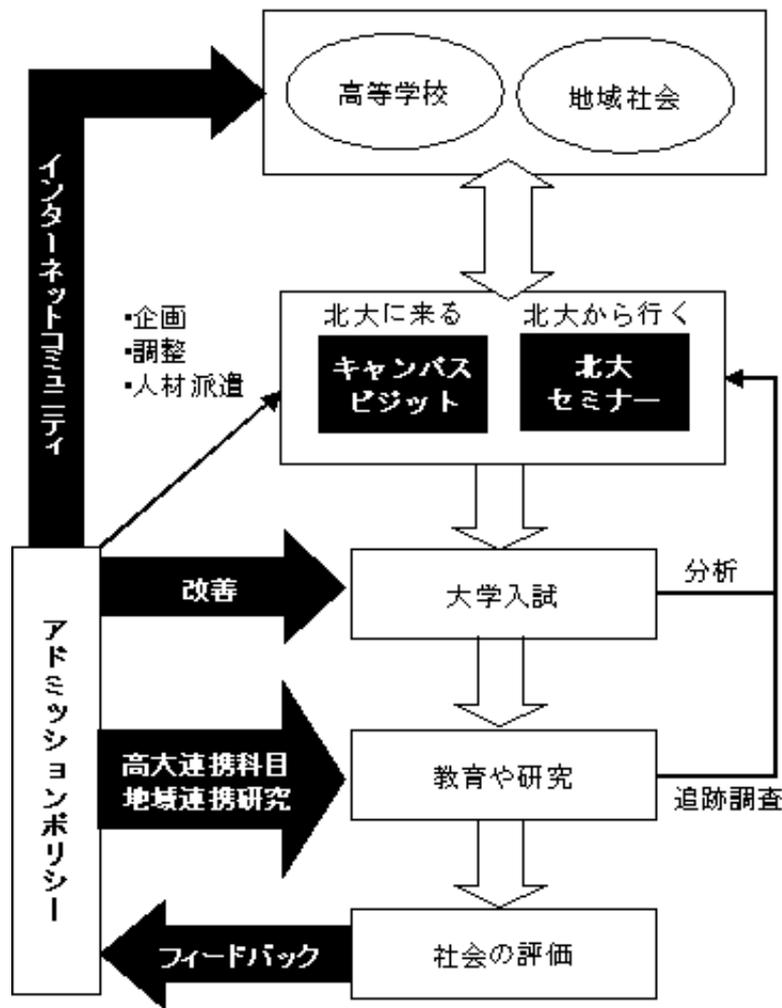


図 1. 北海道大学における高大連携の将来構想

大学入学前の高等学校および地域社会との接点における取り組みは以下の4つに分かれる。

- ・北大 CVP
北海道大学に来てもらう。北海道大学を訪れた高校生や一般市民にキャンパスを通じて学生の視点から北海道大学の教育や研究などの活動を肌で感じてもらう。
- ・オープンキャンパス
北海道大学に来てもらう。北海道大学を訪れた高校生や一般市民に講演や学部紹介等を通じて大学職員の視点から北海道大学の教育や研究を理解してもらう。
- ・北大セミナー
北海道大学から地域に出向く。北海道大学の教員

が様々な地域に出向いて講義等を実施し、その地域の高校生や一般市民に北海道大学の教育や研究を理解してもらうことにより学びへの動機付けを図る(鈴木他 2003, 池田・鈴木 2003, 鈴木・池田 2004)。

- ・インターネットコミュニティ
情報の地域間格差を解消する。キャンパスビジットや北大セミナーに参加した人たちの理解促進や継続的な学びへの動機付けの支援のために、常に大学と個人との接点をもてるようなコミュニティサービスを提供する。

この4つの取り組みは、北海道大学のアドミッションポリシーを反映したものでなければならない。アドミッションポリシーに基づき明確な目的や目標を

設定し、それに準じた手段と評価とを行う必要がある。これにより、高等学校を含む地域全体に、北海道大学に対する一貫した理解を育むとともに、大学および大学進学に対する意識の向上を図る。この3つの取り組みに成功し、学びへの動機付けがなされた生徒が北海道大学を受験しても、その資質をきちんと評価するような大学入試を行っていなければ意味がない。

そこで、上述した4つの取り組みを通じて得られた高等学校の教育やカリキュラム等の情報とアドミッションポリシーとに基づき、大学入試、特にAO入試に関する改善を図っていく必要がある。大学入試で資質に恵まれ学びへの動機付けがなされた学生を獲得することができても、入学後の教育との連携がなければ彼らの資質をさらに伸ばすことはできない。そこで、アドミッションポリシーに基づく教育理念を明確にし、その理念を達成するような教育を実施していく必要がある。また、地域との連携を図るために、地域に根ざした教育や研究を推進する必要がある。最後に卒業者が受ける社会的な評価や大学が社会から受ける評価をアドミッションポリシーにフィードバックし、アドミッションポリシーを定期的に進化させていく。このような一連の流れの中で、北大CVPは北海道大学をまるごと直に感じてもらえる取り組みとして重要である。さらに、北大CVP

は学生がガイドを勤めることにより、高校生や地域社会に対する大学の壁を低くすることができ、1章で述べた高大連携と地域連携の橋渡しを期待できる。

3. 実施体制

北大CVPは学生、教員、事務員の三位一体による取り組みである。それぞれの主な役割を 図2 に示す。

学生は参加者に応じてツアーコースを設計する。設計の大まかな流れは以下の通りである。まず、ツアーのテーマを設定する。たとえば、「北大の理念を探る」「人文科学の最先端」「北大の動植物と触れ合う」「大学一年生体験」「ベンチャー創出特区・北キャンパスを知る」などである。次に設定したテーマにしたがって、キャンパス内の施設等を調査するとともに、教育や研究についても調べる。続いて、どの施設をどの順番で周るかを、時間との兼ね合いで決定し、時間配分を設定する。この時、許可の必要な施設をリストアップしておき、教員と事務とが各施設の許可を取る。コースが決まるとシナリオ作りに入る。コースのそれぞれの場所でどのような説明をするかを、実際に話す時の言葉で書き出す。

コース設計からツアー当日まではメンバー同士で何度もリハーサルを行い、コースとシナリオとを完全に把握しておく。アンケートの作成も当日までに

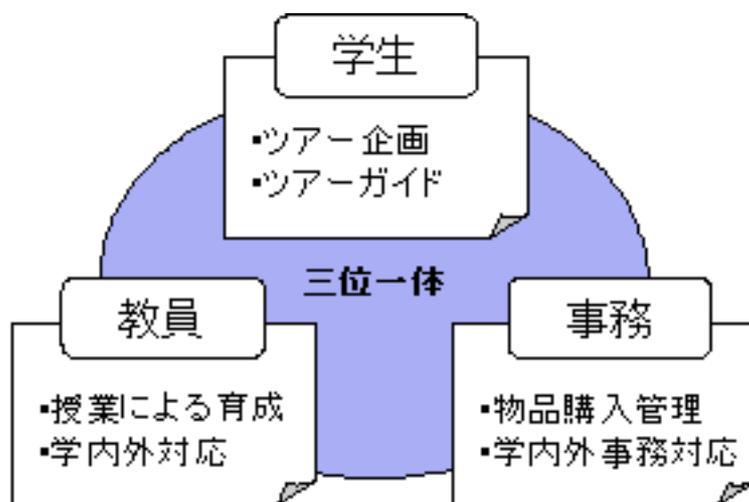


図2. 北大CVPの実施体制

行う作業の一つである。

ツアーは通常メインガイドとサブガイドの2名で行う。メインガイドは参加者の誘導と解説を行い、サブガイドは誘導の手助けと参加者からの質問対応、タイムキーパー、参加者の状況をメインガイドに伝えるなどを行う。一般市民向けの応募制のツアーの場合、往復葉書で申込みをしてもらっている。応募者に対しては、返信用葉書に当日の集合場所等を印刷して返し、応募者を各コースに振り分けるという作業を行う。これらの作業を進めるために、週一回程度、学生、教員、事務すべてが集まって会議を開き、コース設計等の方針について議論している。コース設計等の具体的な内容については、グループごとに集まって実施するとともに、インターネット上の掲示板とメーリングリストとを使って情報交換を行い、作業を進めている。

教員の仕事は大きく分けて3つある。1つ目は、授業を通じたガイド養成である。この授業は平成15年の前期に行われた一般教育演習「北大への招待」である。一般教育演習とは一年生を対象に実施される全学教育科目の一つである。高等学校から大学へ、そして社会への橋渡しとなる科目であり、少人数制・学生参加型授業を展開している。「北大への招待」では上述したツアーコースをグループで設計してもらうことを通じて、協調的な問題解決力を習得することを目的としている。ユニークな点は、高校生の評価を授業評価に取り入れている点である。高校生をガイドし、そのアンケート調査の結果をグループの評価の一部として取り入れている。この授業は19名の受講者があり、うち4名が北大CVPのメンバーに加わっている。2つ目は、高等学校等との交渉である。「北大への招待」の高校生ツアーや、北大CVPで試行したい高校生向けツアーに協力してくれる高等学校を

見つけ、人数や日程等を調整する仕事である。3つ目は、学内の部局や教員との交渉である。上述した授業を含め、学生たちがツアーに取り込みたいという施設や研究を見てもらえるよう、事務と協力して該当する部局や研究者と交渉し、許可をもらい、学生にその結果を伝える。

事務の仕事も大きく3つに分けられる。1つ目は、高等学校や一般市民からのツアー申し込みの窓口である。申し込みのあった人数や日程などを北大CVPの会議や掲示板等で通知し、議題として挙げる。高等学校からの申し込みの場合は、その検討結果を通知し、人数や日程等の調整を行う。2つ目は、教員の3つ目の仕事と同じく学内の部局や教員との交渉である。3つ目は、北大CVPで必要な物品等の手配である。北大CVPの会議で必要と認められた物品の購入手配を行う。

以上、学生、教員、事務が三位一体となってキャンパスツアーを実施している。このような形態は全国でも初めての取り組みと考えられる。

4. 実績と歩み

北大CVPは、平成14年7月からの準備期間を経て、平成15年5月に正式に立ち上がった取り組みである。学生ガイドによる大学のキャンパスツアーの取り組みは道内初であり、また学生・教員・事務の三位一体によるキャンパスツアーへの取り組みは全国的にも珍しいものである。このため、数多くの報道関係からの取材を受けることができ、その取り組みを広く知っていただくことができた。

以下では、北大CVPの実績について、(1)準備期間と、正式に立ち上がった後の、(2)高校生等向けツアー、(3)一般市民向けツアー、(4)産学連携ツアー、

表1. 立ち上げ期のツアー実績

高等学校名	参加者数	実施日時
西城紫水高等学校	37名	平成14年10月5日
札幌北陵高等学校	102名	平成14年10月29日

(5) その他, の5つに分けて説明する。

4.1 準備期間

北大CVPの立ち上げにあたっては、北海道大学大学院国際広報メディア研究科の山田吉二郎教授に協力を仰いだ。山田教授は国際広報における合意形成を研究テーマとしており、学生、教員、事務の三位一体のチームを作るために最適な方だと判断したからである。この期間のツアー実績を表1に示す。

北稜高等学校のツアーが終了するまでのメンバーは、国際広報メディア研究科の修士課程の大学院生、学部学生、教員、事務員を合わせて40名以上に上っていた。このツアーをもって北大CVPの取りまとめは山田吉二郎先生からアドミッションセンターに引き継がれ現在に至っている。北稜高等学校のツアー終了後は、大学院生等が抜けたことにより、40名以上いたメンバーは、半数以下に減った。このメンバーで、平成15年度からの正式な立ち上げに向けて行ったこと、および成果は以下の3つである。

- ・北大CVP紹介パンフレットの作成(「北大道標」)
- ・新メンバーの勧誘(北大CVP紹介ポスターとチラシ)
- ・ツアー用ジャンパーの作成(北大CVPジャンパー)

「北大道標」は学生の視点から作られた北海道大学

では初めての正式なパンフレットであり、初めて北海道大学を訪れた高校生や一般市民等に好評である。北大CVPは、平成15年5月1日に行われた北大交流プラザ「エルムの森」(旧昆虫学教室。国の有形文化財)の開所式での、中村総長や副学長、各部局長および報道関係者を対象としたキャンパスツアーをもって、北海道大学アドミッションセンターの取り組みとして、正式に立ち上がった。また「エルムの森」の中に北大CVPのスタッフルームが設置された。

4.2 高校生向けツアー

高校生向けツアーとは、主な対象が高校生ということであり、主な目的は進路指導の支援にある。このため、参加者は、高校生をはじめ、保護者、高校教員、中学生、中学校教員などである。平成15年4月から11月までに行ったツアーの参加者の内訳を図3に示す。

ツアー内容については概ね好評であり、ほとんどの参加者がまたこのようなツアーに参加したいと回答した。一方、ツアーの効果に関しては、ツアーに参加して北海道大学に入学したくなったか、という質問に対しては、ほぼ全員が「とても入学したくなった」もしくは「入学したくなった」と回答した。また、ツアーが進路選択の役に立ったか、という質問に対してもほぼ全員が「とても役に立った」もしくは「役に立った」と回答した。

自由記述の感想には、「専門的な話が多く難しかっ

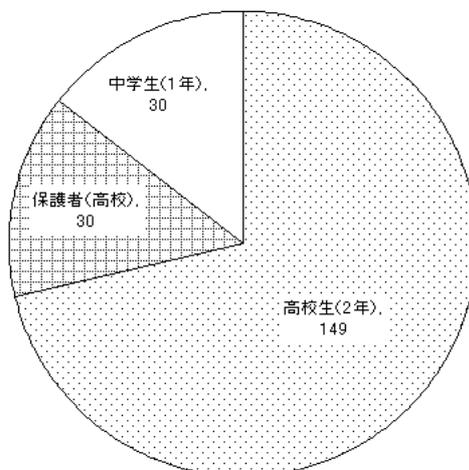


図3. 高校生向けツアーの内訳

た」「質問コーナーを設けて欲しかった」というコメントが散見される。一方的な説明ではなく、参加する高校生等とのインタラクティブなツアーを企画していく必要がある。

4.3 一般市民向けツアー

一般市民向けツアーは平成15年7月から10月まで月一回行われた。参加者数、ツアーテーマ等を表2に示す。

一般市民向けツアーに参加した人は、40歳代以上がほとんどであり、50歳代と60歳代が多くなっている。また、女性の占める比率が7割近くになっている。アンケートの回答では、「大変満足」と回答した人が約7割に上り、ほぼ全員が「また参加したい」と回答した。自由記述によるコメントでは、「いろいろなコースを用意し、事前に選べるようにしてほしい」、「もっと多くの場所を見たい」、「内容的に浅い」といった意見が多く見られた。ガイドに対するコメントは概ね好意的であったが、「もっとしっかり知識を身につけてほしい」といったコメントが散見された。このようなコメントは、一般市民向けツアーではリピーター率が高いことと関係があると考えられる。何度参加しても楽しんでもらえるようなツアーを企画していく必要がある。

4.4 産学連携ツアー

広大な北海道大学札幌キャンパスの北側(北18条

以北)には、北海道大学の研究施設である先端科学技術共同研究センター、低温科学研究所、獣医学研究科(獣医学部)に加え、研究交流促進法に基づき民間施設として建設された北海道産学官協働センター(コラボほっかいどう)が立地している。さらに、これに隣接して道立の試験研究機関(工業試験場、衛生研究所、環境科学センター、地質研究所)と科学技術振興事業団の研究成果活用プラザ北海道が立地している。このエリアは「北大北キャンパス・周辺エリア」と呼ばれており、新たに次世代ポストゲノム研究実験棟、創成科学研究棟、触媒科学センター、ナノテクノロジー研究センターが建設中であり、こうした分野での世界水準の研究開発を背景にした産学官連携の拠点として注目されている。こうした産学官連携を推進する組織が、北海道産学官協働センター(コラボほっかいどう)に入っている財団法人北海道科学技術総合振興センター(通称、ノーステック財団)である。この財団は、産学連携の推進を目的として、道内の民間企業や北海道が出資して作った財団である。全道各地で産業クラスターと呼ばれる産学官連携体を構築するとともに、北海道大学の北キャンパスを中心にフィンランド型のリサーチ&ビジネスパーク構想を推進している。この構想は、大学を中心に、官営の試験場等が取り巻き、さらにそれらを企業施設が取り巻くというものである。これにより、大学での研究成果がきちんとした実証を経て産業に活用されることが期待できる。

表2. 平成15年度の一般市民向けツアーの実績

実施回	実施日時	参加者数	ツアー名称
第1回	6月21日(土) 11:00-	99名	歩いて魅せる北大ツアー
第2回	7月19日(土) 11:00-	50名	歩いて魅せる北大ツアー
第3回	8月23日(土) 11:00-	41名	歩いて魅せる北大ツアー
第4回	9月20日(土) 11:00-	31名	北大ウォークラリー
第5回	10月18日(土) 11:00-	38名	歩いて魅せる北大ツアー

表 3. 平成 15 年度の産学連携ツアーの実績

実施回	実施日時	参加者数	ツアー名称
第 1 回	8 月 9 日 (土) 11:00-	49 名	北キャンパスツアー
第 2 回	10 月 30 日 (木) 10:30-	20 名	北キャンパスツアー
	12:45-	17 名	
	14:45-	16 名	

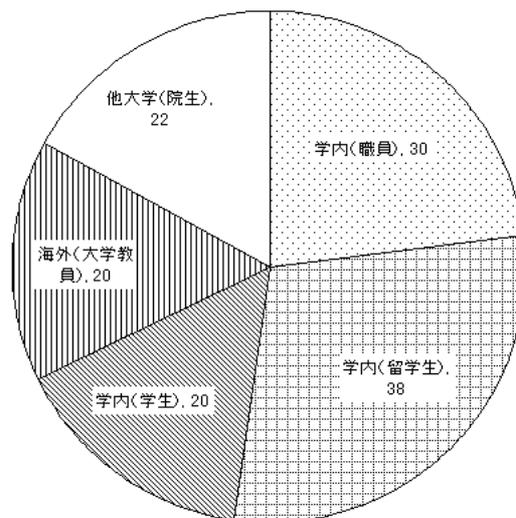


図 4. その他のツアーの参加者内訳

北大CVPでは将来的な発展が期待される北キャンパスを対象に、ノーステック財団と協力して、平成15年10月までに2度のキャンパスツアーを行った(表3)。対象は一般市民であり、一般市民向けツアーと同様の手順で行われた。参加者にとっては一般市民向けツアーの北キャンパス版にすぎないが、北海道大学の産学連携に関する取り組みを知ってもらうという意味で通常の一般市民向けツアーと分けて考えている。

参加者の属性やアンケート結果などは、一般市民向けツアーとまったく同じ傾向であった。

4.5 その他のツアー

上記以外に実施したツアーは、大学を対象としたものであり、学内と学外とに分けられる。学内向けツ

アーの目的は、北大CVPの活動を学内に認めてもらい、協力を仰ぐという北大CVP自体の広報である。学外の大学向けツアーの目的は、北海道大学としての広報活動の一環である。平成15年4月から11月までに実施したツアーの参加者の内訳を図4に示す。

海外を含め、学外からの参加者には好評であった。しかし何よりも反響が大きかったのは学内の教員に対してである。長年大学で生活をしていながら、初めて入る建物等に好奇心を掻き立てられている様子は印象的であった。

5. おわりに

北大CVPは学生主体であること、また学生のボランティアであるということから(1)大学全体として

の支援の必要性 (2) 地域住民および同窓生との連携の必要性 (3) 特に高校生に対する受け入れ条件, について問題が生じている。

キャンパスツアーに参加した高校生や一般市民からは, 大学内の研究施設やそこでの活動内容, 実際の教育の現場などを見たいという要望が多く寄せられる。こうした要望を実現するためには施設見学の許可や研究者の協力などが必要である。しかし, 例えば施設見学の許可をアドミッションセンターがとっても, 当日に学生だけで施設内に入ろうとすると警備員に止められるといったことが生じる。また研究者の協力を得ることも学生だけでは難しい。こうしたことから, 北大CVPの学内での認知度を向上させ, 大学全体としての支援を取り付ける必要がある。

さらに, 一般市民向けツアーは土曜日に行われることが多く, 実際の研究活動や教育活動の現場を見せることは難しい。しかし, 授業等のある学生に平日にツアーを依頼することは困難である。この問題を解消するために, 北海道大学に関する意識の高い地域住民や同窓生と連携を図り, 一般市民向けツアーを平日にも行えるようなボランティア組織の結成が必要である。

もうひとつの問題は高校生向けツアーである。高等学校における修学旅行は総合学習のひとつという位置づけに変わりつつあり, 大学進学への動機付けを兼ねて北海道大学を学年単位で訪れるケースが増えている。しかし, そうした高校生の中にはまったく北海道大学に関心を持たない生徒もいる。このような生徒たちをツアーした場合, ツアーを担当した学生は深く傷ついてしまう。ツアーガイドがアルバイトであればお金のためと割り切ることもできよう。しかし, ボランティアとして善意で参加している学生にとって, このような生徒たちをツアーすることは北大CVPからの離脱につながる。このような問題を回避するため, 現在高校生の受け入れ条件および事前指導に関する規則を作成中である。この規則に

対する高等学校の理解を得ることが必要となる。

この他の大きな問題は, 一般市民向けツアーの募集広報手段の確保である。今年度は, 一般市民向けツアーの募集広報は北海道新聞の協力と善意により無償で記事を掲載していただけた。しかし, 大きな事件が起こった場合は記事を載せていただくことは難しく, また, 北大CVPの取り組みが目新しい内は記事に載せてもらえるが陳腐化してきた時には営利企業としては当然ながら記事を継続的に掲載することは難しくなる。そこで, 北海道大学のホームページのトップページにニュースとして記事を掲載してもらうとともに, 北大CVPの取り組みを広く市民に知ってもらい, 定期的に北海道大学のホームページを一般市民に見てもらえるようにする必要がある。

最後に, 授業や実験等で忙しい中, 平成14年12月から北大CVPの学生代表を快く引き受けてくれた工学部3年生の上田剛君をはじめとする学生諸君, そして入試業務で忙しい中, 物品の発注や学内外との調整, 時にはガイドまでしていただいたアドミッションセンターの事務の皆様に感謝いたします。

参考文献

- 池田文人, 鈴木誠 (2003), 「北大方式の高大連携活動の枠組みと十勝地域における実践例の検証」, 『大学入試研究ジャーナル』(国立大学入学者選抜研究連絡協議会) **13**, 31-34,
- 鈴木誠, 阿部和厚, 山岸みどり, 池田文人 (2003), 「高大連携を重視した北海道大学リクルート戦略(1)」, 『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 **10**, 39-48.
- 鈴木誠, 池田文人 (2004), 「北海道大学が目指す新しい高大連携」, 『大学入試研究ジャーナル』(国立大学入学者選抜研究連絡協議会) **14**, (印刷中)